

コウノトリ飛来地における地域活性化の取り組み事例

生物多様性研究分科会 北村 清

1. はじめに

雲南市では、昨年度に引き続きコウノトリのヒナが誕生し、地域ぐるみでコウノトリに関するさまざまな取り組みが行われているが、現段階では組織づくりを含めて試行錯誤の状態であり、課題も山積している。

本投稿では、コウノトリによる地域活性化を推進している豊岡市、鳴門市、越前市、野田市の事例を紹介することにより、雲南市での活動の一助になればと思う。

2. 豊岡市の事例

2-1 取り組みの背景と経緯

国内で最後まで生き延びてきた豊岡地域のコウノトリは、昭和 46 年ついに野外での絶滅に至った。豊岡地域では、昭和 30 年から官民一体となった組織的な保護活動が起こり、昭和 40 年からは兵庫県により人工飼育が始まり、平成 11 年には、兵庫県立大学併設の研究機関であるコウノトリの郷公園が開園した。平成 17 年からはコウノトリの郷公園より試験放鳥が行われ、現在野生のコウノトリは 100 羽以上となっている。

2-2 科学、行政、地域社会の連携による取り組み

豊岡市では、コウノトリの郷公園を中心として①コウノトリに係る科学、②行政、③地域社会（コミュニティ）の連携が行われさまざまな取り組みが行われている。具体的な取り組み内容を以下に示す。

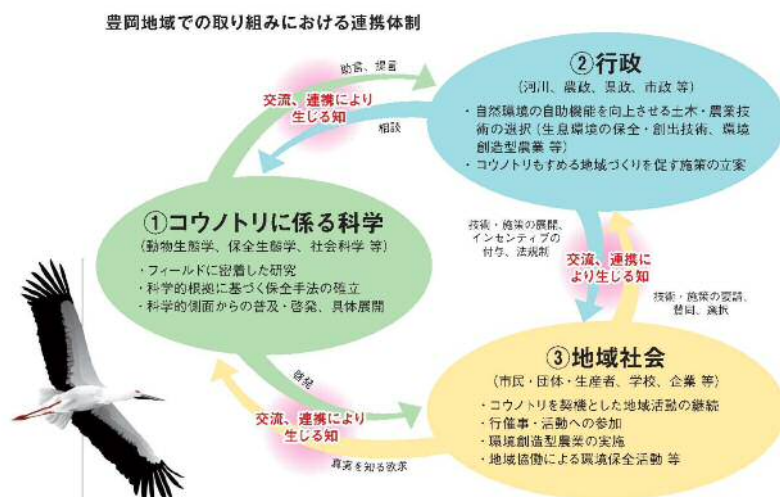


図-1 豊岡地域におけるコウノトリ野生復帰に係る取り組みの進展を支える体制の全体像

1) 多くの来訪者が訪れるコウノトリの郷公園

コウノトリの郷公園は、コウノトリ野生復帰の中心地として、人工繁殖施設や、自然観察ゾーン、豊岡市立コウノトリ文化会館、兵庫県立大学豊岡ジョ・コウノトリキャンパスが併設している。公開エリアでは、放鳥されたコ

ウノトリの餌付けが行われており、その時間帯になると数十羽のコウノトリが集まることから、多くの来訪者で賑わっている。

2) 農産物ブランド化の推進

コウノトリが生息できるのは、農薬や化学肥料に頼らない多様な生きものを育む安全で安心な田んぼづくりが必要である。農産物の認証ブランド「コウノトリの舞」や「コウノトリ育むお米」などのブランド化を推進し、付加価値の高い農産物を生産している。



残留農薬が国基準の1/10以下
栽培方法・検査結果の公表などに加え
(水稲)化学肥料・農薬の使用が
慣行の1/2以下
(野菜)環境に配慮した施肥

図-2 豊岡市認証マーク

3) 環境経済型企業の誘致

環境を良くする豊岡の取り組みに賛同する企業がさまざまな事業を展開している。その経済効果がさらに環境を良くする取り組みに繋がっている。具体的には、太陽電池の製造、間伐材による木炭製造、リサイクル商品、安全安心な食品の製造等が行われている。

4) 地元住民の取り組み

餌場としての冬水たんぼの実践（助成事業）、放棄水田の湿地化（田結地区）、ボランティアガイド等多くの地元住民が参加し、コウノトリの保護に努めている。

2-3 全国ネットワークとトップランナーとしての役割

豊岡地域のコウノトリは日本国内で 200 を超える市町村に飛来し、平成 26 年 3 月には韓国にまで飛来した。豊岡市は、これらの市町村でのコウノトリの定着やコウノトリを活用した地域活性化に取り組んでいく自治体のネットワーク化を推進しそれらのトップランナーとしての役割を担っている。

3. 鳴門市の事例

3-1 取り組みの背景と経緯

鳴門市では、平成 27 年 2 月に豊岡より飛来したペアが巣作りを行ったがヒナの誕生には至らなかった。平成 27 年 5 月には、コウノトリの定着と繁殖を目指す活動を通じて、豊かな自然を活用した農業振興や地域活性化を図るため、地域の農業団体や大学、行政などが連携して「コウノトリ定着推進連絡協議会」

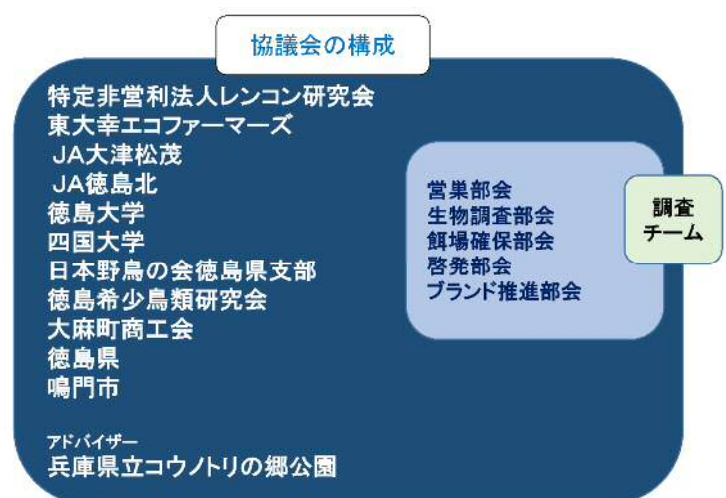


図-3 コウノトリ定着推進連絡協議会の構成

が設立された。平成 28 年にも産卵が確認されたが、ヒナの誕生とはならなかった。しかし、平成 29,30 年の二年連続自然繁殖が確認され、地元では大いに盛り上がっている。

3-2 幅広い団体による取り組み

コウノトリ定着推進連絡協議会は、最初の営巣が確認されて 3 ヶ月後には設立され、産・学・官・民の 11 団体により運営されている。

具体的な活動内容は表-1 のとおりである。

表-1 コウノトリ定着推進連絡協議会の活動内容

具体的施策	取り組み内容
親子観察会	コウノトリの観察だけでなく、生き物や環境、農業や農産物の学習も行っている。
コウノトリの餌になる生き物調査	徳島大学を中心として生き物調査を行い、コウノトリがどのような餌を食べているのか調査を行っている。
コウノトリの行動調査	ペアのメスに装着された GPS のデータから、鳴門市での行動圏を調査した。
コウノトリの繁殖行動調査	巣の中の様子を見ることができないため、産卵日や本格抱卵開始を推定するために調査チームを結成し 1 日 12 時間の観察を実施した。
コウノトリブランドの推進	平成 29 年 8 月から鳴門市が「鳴門市コウノトリブランド認証制度」の運用を開始し、レンコン等のブランド化を推進している。
より環境にやさしい農業を目指して	レンコン栽培では、環境にやさしい農業が行われているが、生産者団体や徳島県、鳴門市では、化学肥料をさらに減らした「エコファーマー」や「特別栽培」に取り組んでいる。
マナー対策	撮影や観察が、コウノトリの定着や繁殖の支障にならないように、看板を設置すると共に、観察者の駐車場の場所を案内する看板も設置した。
ビオトープ作り	大麻中学校、板野高校、徳島大学の学生により餌場確保の目的でビオトープ作りが行われた。
足環装着	徳島県は豊岡市で足環装着の技術を学び、生まれてきたヒナに足環装着を行った。
ホームページや SNS での情報発信	コウノトリのようすやコウノトリ定着推進連絡協議会の活動を発信している。

4. 越前市の事例

4-1 取り組みの背景と経緯

昭和 32 年 3 月に旧武生市（現越前市）の電柱に兵庫県以外では 30 年ぶりに営巣が確認され、昭和 34 年 6 月に武生市コウノトリ保護会が発足した。その後、人工巣塔での繁殖や他地区からの飛来が確認されたが、昭和 40 年代前半にはほとんど姿をみることができなくなった。平成 22 年 4 月、豊岡市から巣立った放鳥 2 世のコウノトリが越前市に飛来し、「えっちゃん」と命名され地元でもコウノトリの定着に向けた機運が高まった。平成 23 年 6 月には、「コウノトリが舞う里づくり推進協議会」が設置され、里の営みとコウノトリも住める環境を取り戻した「生きものと共生する越前市」を実現していくための取り組みが行われている。平成 23 年 12 月には、豊岡市から送られたコウノトリのつがい 1 組の受け入れに伴い「コウノトリ PR 館」が開設され、コウノトリに関するパネル展示や飼育ゲージに設置された監視カメラの映像をモニターで公開されている。平成 26 年 6 月には、飼育ゲージでヒナが誕生し、平成 27 年 10 月に 2 羽が越前市より放鳥された。この若鳥の 1 羽は、後に雲南市で営巣する「げんきくん」で GPS 情報により放鳥から現在までの位置情報が福井県の HP で公表されている。その後も毎年、放鳥され、今年度までに 9 羽が全国各地で暮らしている。

4-2 コウノトリが舞う里づくり実施計画

越前市は、平成 23 年に「コウノトリが舞う里づくり実施計画」を策定し、市民、農業者、自治組織、商工業者、研究機関や教育機関、各種団体、行政等が連携し、コウノトリをシンボルとした里地里山の保全再生や環境整備の取り組みを推進している。コウノトリに関する施策を表-2 に示す。

表-2 コウノトリが舞う里づくり実施計画の基本的施策（抜粋）

具体的施策	取り組み内容
退避溝の整備、推進	国の支援制度を積極的に活用し、特別栽培米作付水田の不作付部分（ぬるめ）や湧水部分を中心に整備を進める。
休耕田ビオトープの整備	餌場として効果のある場所で、休耕田ビオトープの整備を推進する。
退避溝・ビオトープ等の普及	モデルとして整備した待避溝や休耕田ビオトープ、河川魚道、水田魚道などの効果の検証・改良及び普及に努める。
冬期湛水や中干し延期の推進	国の環境保全型農業直接支払制度や市の上乗せ支援を活用する。

コウノトリ呼び戻す農法米の推進	ブランド米（コウノトリ呼び戻す農法米）の生産拡大に向けた県・市・JAによる技術指導やPRを行う。
コウノトリを題材とした環境教育	小学校におけるコウノトリの飼育や里地里山の再生についての環境教育を実施する。
見学者受け入れ体制の拡充	コウノトリPR館の充実、見学コースマップ作成、「コウノトリ語り部」の育成を行う。
情報発信	市民啓発イベントの開催及びホームページやフェイスブック等を始めとする多様なネットワーク媒体を用いた全国への取り組み発信、広報誌等での周知を図る。

5. 野田市の事例

5-1 取り組みの背景と経緯

野田市では、未来を担う子どもたちに多くの生きものがある自然環境を残したいと考え、生物多様性のシンボルとしてコウノトリの舞う里を目指し、飼育施設「こうのとりの里」が設けられ、平成24年12月に多摩動物公園から2羽のつがいのコウノトリを譲り受け、飼育が開始された。平成27年3月には待望のヒナが誕生し、平成27年5月に3羽が巣立ちした。その後、つがいのコウノトリには毎年ヒナが誕生し、今年度までに合計8羽が巣立ちしている。

5-2 コウノトリの関東地域における野生復帰にむけて

各地で進められているコウノトリ定着の取組みの中、全国で最も人口が密集する関東地域においてはじめて野生復帰を目指す野田市の取組みは、コウノトリの生息域を拡げる観点からも、大きな意義と役割を果たすことになる。野田市では、コウノトリの野生復帰を通じ、生態系ピラミッドの頂点に立つコウノトリも生息できる、「持続可能な地域づくり」を目指している。活動の主体は、野田市みどりと水のまちづくり課が事務局として「コウノトリと共生する地域づくり推進協議会」であるが、平成27年3月に「コウノトリ生息域内保全実施計画」が策定された。その中の具体的な取り組みについて示す。

表-3 コウノトリ生息域内保全実施計画の基本的施策（抜粋）

具体的施策	取り組み内容
コウノトリの飼育・繁殖拠点の整備	耕作放棄地等を市が出資して設立した（株）野田自然ファームで復田や湿地の再生、魚道の整備、環境保全型農業の推進、水田型市民農園の実施等自然環境の保全・再生・活用を進めている。

冬期湛水モデル水田の取組み	生きものの生息に配慮した江と魚道の整備をセットにした「冬期湛水モデル水田」を農家の協力のもと実施している。
餌生物生息環境調査	コウノトリの餌となる生き物の生息状況について、豊岡市、越前市との比較を実施した。
市民意識の醸成	自然と共生した地域づくりに係る取り組みや、コウノトリについての普及啓発を進めることにより、市民の意識の醸成に努める。
市民応援団の設立	環境や自然の保全に興味を持ち、野田市のイメージアップを図ることに賛同した市民応援団を募集し、第 1 号として「川間地区コウノトリを愛する会」が設立された。
多様な広報媒体を通じた情報発信	コウノトリの飼育・繁殖状況や市のコウノトリと共生する地域づくりに係る取り組みについてホームページや市報等を通じて情報の発信を行う。
広域的な連携体制	関東広域における多様な主体の連携・協働による取り組みの検討・推進の場である「関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会」やその関連組織、「利根運河協議会」「コウノトリの舞う地域づくり連絡協議会（江戸川・利根川・利根運河地域）」などを通じた近隣エリアとの連携強化を図る。

6. おわりに

コウノトリによる地域活性化の取り組みについて 4 市の事例を紹介したが、いずれの市においても産・学・官・民の連携による協議会が設立され、活発な活動が行われている。また、コウノトリをシンボルとし、各市の特色を生かした環境保全や環境整備の計画が策定され、ホームページで公開されている。

雲南市についても、これら先進地を参考にしてコウノトリが棲みやすい環境づくりが推進され、多くのコウノトリが空を舞う地域となることを願っている。

《参考文献》

- ◎コウノトリ野生復帰に係る取り組みの広がり分析と評価（豊岡市）
- ◎コウノトリ定着推進連絡協議会 HP(鳴門市)
- ◎コウノトリが舞う里づくり実施計画(越前市)
- ◎コウノトリ生息域内保全実施計画(野田市)